＜前回：２．現代神学１：自由主義神学と弁証法神学＞

（１）近代的知と自由主義神学

１．19 世紀のキリスト教思想

＜「第４部　近現代」、土井健司監修『１冊でわかるキリスト教史――古代から現代まで』日本キリスト教団出版局、２０１８年＞

「近代の知的世界は、啓蒙主義の科学理念を基盤に、キリスト教思想をも巻き込みつつ展開した。ここでは、近代の知的世界の基本を自然主義と歴史主義という 2 点において説明し、それに基づいて、19 世紀に確立した近代聖書学について考えてみたい。

① 近代的知のモデルとしての自然主義

② 歴史主義とキリスト教の相対性

近代的知のもう一つの特徴として、歴史主義を挙げることができる。近代の歴史概念は多義的でありしばしば混乱した議論の原因となってきたが、基本的には次のようにまとめることができる。すなわち、人間が経験する現象の一切が歴史的であり、その歴史的現象の説明と理解は、歴史的連関の内部で行われうるし、行わなければならない、と。キリスト教にとって歴史主義がもたらしたのは、キリスト教を歴史的現象として理解し研究するという態度であり、それは突き詰めて考えられるとき、キリスト教の教義、道徳、価値観の相対性の認識（歴史相対主義）をしばしば帰結することになった。キリスト教は歴史的連関の中で成立発展してきた歴史的宗教であり、その真理や価値がその歴史的範囲（ヨーロッパ世界）内に限定されたものであり、決して普遍的なものではないという議論である。古代から中世にかけてのキリスト教が自然法に基づいた普遍性の議論を展開できたのと比べれば、近代の知的状況はキリスト教の真理と普遍性を自明視することを困難にした。

③ 近代聖書学とその諸前提

ルネサンス期に始まった人文主義の文献学が宗教改革の聖書主義と連関することによって、聖書の学問的研究は近代を通して進展したが、19 世紀には、近代的学問としての近代聖書学が成立することになった（ドイツを中心に）。近代聖書学は、法学、言語学、哲学、神学、地質学、生物学などの諸学問とともに、歴史主義あるいは近代歴史学と強く結び付いており、その点で、近代聖書学は、近代世界（近代的な日常性）へのキリスト教の適応という歴史的動向の中に位置するものと言えよう。

19 世紀の近代聖書学の成果については、旧約聖書についての資料仮説、古代地中海世界の宗教史の文脈におけるキリスト教の位置づけ、イエス伝研究など、さまざまなテーマが挙げられる。こうした聖書学的研究は、トレルチまたパネンベルクが指摘するように、歴史主義（歴史の出来事は歴史的因果性の内部で説明する。超歴史的な事柄は持ち込まない）に依拠しており、そこから帰結するのは、近代聖書学における過去の出来事は歴史家（＝研究者）の「現在」という視点から解釈するという方法論的態度であった。」

２．ドイツ・プロテスタント神学諸潮流

19 世紀の欧米のキリスト教の特徴的な動向を思想的な側面から見ておこう。

フランス革命とナポレオン戦争後の時代状況は、ドイツに国家的また教会的な統一（国民国家形成）への努力を要求することになる。プロイセンにおけるルター派と改革派との合同教会の成立（1817 年）はその成果であり、国民的統一の機運は、ウィルヘルム 1 世のもとにおけるドイツ帝国成立へと結実する（1871）。この間、ドイツの著しい工業化に伴い社会的矛盾が激化し、慈善事業と一体化した「内国伝道」が進められた。

３．自由主義神学：神学の自由主義

・近代プロテスタント神学の課題＝宗教改革以降の神学諸潮流の調停可能性

キリスト教合理主義／調停神学／正統主義神学／強硬な伝統主義

自由主義　　積極主義（実定主義）

Liberalism　　Positivism

・メルクマールとしての聖書学

・ドイツから世界へ

（２）トレルチ

・トレルチ（Ernst Troeltsch,1865-1923）。ドイツのプロテスタント神学者、宗教哲学者。1892 年からボン大学、1894 年からハイデルベルク大学で組織神学の教授。1915 年からはベルリン大学で哲学の教授。

２．基本的課題

「実践としての倫理的領域のなかでも、とりわけ社会倫理の領域において、トレルチは教義的伝承と近代世界との対立葛藤が現われることを看取する」、「社会集団の宗教的実践として理解され答えられるべきである」（220）

３．『社会教説』（Die Soziallehren der christliche Kirchen und Gruppen, 1912）

福音→各時代における国家、経済、家族、社会などをめぐる諸教説

諸類型（理念型）：教会（Kirche）、分派（Sekte）、神秘主義（Mystik）

４．「伝統との連関を保ちつつ新しい時代において新しい綜合を創造する「精神力」の連続性としてのエトス」は「まず社会関係である」（228）

５．キリスト教の本質

『＜キリスト教の本質＞とは何か』（1903）　cf. ハルナックとその教理史

批判としての本質、発展としての本質、理想としての本質（本質規定とは本質形成である）

「本質とは直観的な抽象であり、宗教的・倫理的な批判であり、活動的な発展概念であり、そして未来を形成し新たに結ぶ仕事を据える理想なのである。」（２，98）

６．近代プロテスタンティズムの区分

古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム

７．宗教史学派の神学

シュライアマハー（Dogmatik から Glaubenslehre へ）、リッチュルの線上。

８．歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義

・批判（Kritik）　・類推（Analogie）　・相互作用（Wechselwirkung）あるいは相関（Korrelation）

９．「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

・二つの研究方向

1) キリスト教の純粋に歴史的研究　　2) それに基づいたキリスト教の妥当性

・教義学の 4 つの課題

伝統的な教義学の解体、『信仰論』

10．カント的な宗教哲学の構想

・心理学と認識論　→　カントの批判哲学による解決

経験から経験のア・プリオリな条件へ、実証主義的宗教心理学への批判

11．カント主義の拡張　cf. 波多野

認識論のみがアプリオリではない。精神活動の諸領域のアプリオリな構造。

宗教的アプリオリ、この宗教的アプリオリが現実化する（心的現象）

↓　　cf. ユングの元型（林道義）

12．宗教の本質：

13．歴史主義の諸問題：歴史主義と歴史相対主義

14．キリスト教の絶対性（普遍史）からヨーロッパ的文化総合へ

（３）弁証法神学運動と神学刷新

・神学の学問性をめぐる議論：バルトとハルナックの論争

同時期の学問論論争の中に位置する
・社会とキリスト教・教会との関係

（補足）弁証法神学の意義

１．Dialectical Theology

A title applied to the theological principles of K.Barth(q.v.)and his school on the ground that, in distinction from the dogmatic method of ecclesiastical orthodoxy, which treats of God as a concrete Object (via dogmatica), and the negative principles of many mystics, which forbid all positive affirmations about God (via negativa), it finds the truth in a dialectic apprehension of God which transcends the 'Yes' and the 'No' of the other methods (via dialectica). Its object is to preserve the Absolute of faith from every formation in cut-and-dried expressions.

After the publication of Barth's Romerbrief in 1919 the Dialectical Theology rapidly spread, ...

(Cross/Livingstone(eds.),The Oxford Dictionary of the Christian Church, Third Edition, 1997, p.476)

Alister McGrath(ed.), The Blackwell Encyclopedia of Modern Christian Thought, 1993.

Religion in Gechichte und Gegenwart, Vierte Auflage (RGG4), Band1-8, Mohr Siebeck, 1998-2007.

２．現代神学の発端（自由主義神学・神秘主義批判）、『時の間』

バルト、ブルンナー、ブルトマン、ゴーガルテン、トゥルナイゼン、メルツなど。

近接して、ティリッヒ、ボンヘッファー、ニーバー兄弟など。

↓

1920 年代から 60 年代にかけて、プロテスタント神学の主潮流を形成する。

ラーナー、バルタザールなど、カトリック神学への影響。

日本：高倉徳太郎、熊野義孝、桑田秀延、滝沢克己ら、そして次の世代へ。

cf. 1980 年代以降の自由主義神学の再評価の動向

バルトらの弁証法神学の批判的検討の必要性

３．『岩波　キリスト教辞典』より

「弁証法神学」（寺園喜基）

第一次世界大戦後、1920 年代、ヨーロッパに起こった神学運動、危機神学。主権的な神の自由を強調。バルトの『ロマ書』(1919)に出発点を持つ。人間的体験や内面性を排除するのではないが、それらを基礎づけるものとして神の自己啓示を強調。19 世紀のプロテスタンティズムを自由主義、文化主義、歴史主義と批判。人間は罪人であり、神の言葉を聞くことができるのみ。神の言葉を強調。キリスト中心的な啓示理解を展開し、ヒトラーとドイツ的キリスト者に抵抗。しかし、ゴーガルテンは民族主義とナチズムに接近、ブルンアーは自然神学を認め、ブルトマンは実存論的神学へ進んだ。この神学運動は 20 世紀の神学と教会に大きな影響を与えた。

３．　カール・バルト

（1）バルト１ ―『教会教義学』以前

「バルト（Karl Barth, 1886-1968）」（天野有）

スイスのプロテスタント神学者。ベルン、ベルリン（ハルナック）、テュービンゲン、マールブルク（ヘルマン）で神学を学ぶ。ジュネーブの副牧師を経て 1911 年からザーフェンヴィルの牧師、10 年間「赤い牧師」として労働問題に取り組む。第一次世界大戦を支持する神学教授らに失望し自由主義神学と決別。ブルームハルト父子の影響下『ロマ書』を執筆。以後 40 年にわたり、ゲッティンゲン、ミュンスター、ボン（告白教会の指導者

としてナチ政府により罷免)、バーゼルの各大学で教える。戦中は「反ユダヤ主義は聖霊に対する罪である」としてスイス亡命のユダヤ人救援活動、戦後の西側陣営の核武装に公然と反対。晩年は 10 年間刑務所で説教。主著『教会教義学』。欧米のみならず、日本の教会・20 世紀後半以降の神学にも多大の影響を与え続けている。

↓

バルト神学自体をキリスト教思想史の中に位置づけ解釈する作業。

「現在のわれわれの関心は、このような相対的神学史的評価をおこなうことよりは、むしろそれぞれのふくむ真理契機を明らかにし、その現代的意義を問うことにある。そしてそれぞれの真理契機をいかなる思惟の場において獲得できるかを問うことにある。」(森田、292)

４．19 世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学（自由主義神学）に対する徹底的な批判（戦争神学批判）とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し。

・フォイエルバッハの宗教批判（神学は人間学である）の真理性。

・神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。

↓

ハルナックとの論争、神学の学問性をめぐって

19 世紀の自由主義神学における学問的神学の基盤としての歴史学

1910 年代から 1920 年代の学問論論争の一端（客観的な学的体系か生か）

５．宗教社会主義運動（スイス）、弁証法神学（危機神学、新正統主義、神の言の神学）の運動 ── ブルトマン、ブルンナー、ゴーガルテンら ──

（２）バルトの宗教社会主義批判──自由主義神学・宗教社会主義から「ローマ書」へ

１．スイスやドイツにおいてなされたキリスト教と社会主義との積極的な関係づけの試みとしての宗教社会主義。クッター、ラガツ

井上良雄『神の国の証人ブルームハルト父子──待ちつつ急ぎつつ』新教出版社。

２．カール・バルト：

自由主義神学、ザーフェンヴィルの労働問題、宗教社会主義運動

→　第一次世界大戦における戦争政策に対する神学者を含むドイツ知識人の公然たる支持、ドイツのキリスト教社会主義の愛国主義運動への転換。

宗教社会主義から弁証法神学への転換：新しい世代の神学者において共有。

３．「ストライキとゼネストと街頭闘争、もし必要ならば、それらはなされねばならない。しかし、それに対する宗教的正当化や栄光化はなされるべきではない！　……社会民主主義的に、しかし、宗教的・社会的にではなく(*nicht* religiös-sozial)！」(Barth, 1919, 520f.)

４．批判の論点：宗教社会主義がその正しさを主張する際に、「キリスト教的」「宗教的」であると述べること。「宗教的」と主張することによって、政治という「この世」の事柄を宗教的神学的に正当化しようとするあり方。

「神の判決と審判」、「神の革命」を、あたかも自らの力で（「別の革命」として」）遂行しようとするところに、「革命家の悲劇」(Barth, 1922, 464) と不義が存在する。

宗教社会主義における「宗教的」と「社会的」を「宗教的―社会的」という仕方で結合する「ハイフン」が人間の不遜（巨人主義）であるとの批判

５．『ローマ書講解』の基本的認識：「神は天にいまし、汝は地上にいる！」(ibid., 294) との神と人間の「無限の質的差異」に基づいている。バルトにおける政教分離原則の徹底化。

６．バルトにおける政教分離原則は、単に国家と教会を原理的に区別するにとどまらず、むしろ、両者の区別が生じるその根源から、いわば逆説的にキリスト者の政治的実践を生み出すものとなったのである。キリスト教の弁証は、特別な弁証神学によって遂行されるのではなく、神学が真に教会的神学に徹するところにおいてこそキリスト教の弁証は有効になされる。

７．キリスト教社会主義の限界がその楽観的な人間理解にあるとすれば、宗教社会主義の問題も、同じ人間の問いへと収斂する。

８．神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機　→　危機神学

・キルケゴール的モチーフ

・ヴァイスとシュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見の影響

終末論、しかも現在的終末論の強調。

「弁証法神学の動因」「第一は、従来の自由主義神学とは異なった新しい聖書解釈である。第二は、宗教改革者の神学の新しい解釈である。第三は、キェルケゴールの再発見である。」（森田、278）

↓

『ローマ書』（第 2 版・序言）。「わたしに『体系』があるとすれば、それは、キェルケゴールが『無限の質的相違』と呼んだものに、その消極的かつ積極的意味において、できるだけ注目することである」。

ヘルマン・コーヘンの「知られざる神」、ルドルフ・オットーの「絶対他者」

↓

「有限性において自立しようとする人間にたいする審きとして先鋭化する。」（森田、282）

「弁証法神学の最初の出発点は、今日ではいずれの神学者によっても堅持されていない。」（森田、292）

９．歴史神学の後退。

歴史神学は必要ではあるが、「補助学」(Hilfswissenschaft)に過ぎない。

「弁証法神学の問題点は、知られざる神自身は歴史のどこにも入らず、ただ有限者に「触れる」だけである、というバルトの解釈にある。」（森田、290）

「バルトは任人間イエスの本来的歴史を控えめに（接続法によって）「原歴史」(Urgechichte)と呼び、これにたいして参与する人々の歴史を「第二義的、派生的、間接的意味」の歴史と呼ぶ。第一の歴史において第二の歴史は存在する。」（森田、347）

10．アンセルムス論と神学の方法：知解を求める信仰、信仰固有のラチオ（神学固有の学問性）の展開としての神学。神・啓示から。楕円に対する円＝キリスト論集中。

↓

神の言葉の神学、教会教義学

11．宗教的社会主義批判と宗教批判　→　人間理解の問題

「宗教は不信仰である」、「神の啓示は宗教を止揚する」というバルトにおける「宗教と啓示」との峻別に基づく宗教批判（『ローマ書講解』から『教会教義学』まで）。

↓

バルト以後における宗教社会主義の可能性。バルトの宗教論（宗教批判）の妥当性の吟味。

（３）バルト２ ──『教会教義学』を中心に

1930 代以降：ナチス・ドイツ的キリスト者に対する教会闘争を指導・バルメン宣言

・弁証法神学を超えて、『教会教義学』（KD、「神の言の神学」）へ

・教会闘争、自然神学論争（ブルンナー）

自由主義神学と弁証法神学との対立から、本来の神学的思惟へ
神を投影する人間の想像力の汚染を脱却した神学構築の試み
１．『教会教義学』の方法と体系
２．アンセルムスの発見。
『知解を求める信仰』(*Fides quaerens intellectum: Anselms Beweise der Existenz Gottes im Zusammenheng seines theologischen Prigramms*,1931.)
← アンセルムス『プロスロギオン』、存在論的神の存在論証
← アウグスティヌス「理解するために信ぜよ（信じる）」（Credo ut intelligam）
神観念（「これ以上大きなものが考えられない或る者」）から神の現実存在へ
心の内と外？、大きさ？
３．知解を求める信仰：信仰固有の、信仰自体が可能性として内包するラチオ（神学固有の学問性）の展開としての神学。
神・啓示から。楕円（シュライアマハー）に対する円＝キリスト論集中。
「信仰と理性」に対して「信仰から理性へ」
神の啓示と信仰が接続するのが、「キリストの出来事」であり、その認識根拠は聖書的テキスト。
４．宗教と啓示との峻別：フォイエルバッハ問題への解答の一環
宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力＝自己救済の試み、
不信仰としての宗教
５．神の言葉の神学としての教会教義学
神の言葉（啓示）の三一性：神の第二位格＝キリスト／イエス、聖書、説教
↓
神学体系の基本構造としての三一性
６．福嶋揚『カール・バルト――破局のなかの希望』ぷねうま舎、2015 年。
「バルトの主著『教会教義学』」「未完の思想的「運動」」「その厖大な著作群を貫く、最初期から晩年期まで変わることのない、バルトの「死生観」」(16)
「筆者は、バルトの死生観がまさしくこのイエスの逆説的な死生観と共鳴し一致するものだと考える」(17)
「「死」を通してのみ開かれる「生命」へと向かう逆説的運動」「永遠が時間に接する各瞬間において生起するという」(22)
「「永遠が時間になる」」「永遠は時間を排斥する無時間性ではなく、時間との間に、不可逆・不可分・不可同な秩序を保ちつつ、時間へと生成することが、この逆説の内容である」
「ロゴスとは自らを開示し伝達するものである」、「開示と隠蔽との二重の性質を持つ」(23)
「バルトの思想は、十字架につけられたキリストへの集中、キリスト論的集中によって方向づけられている」(24)
「信と知の循環」「絶対主義と相対主義の狭間をゆくキリスト教思想」
「バルト神学を源泉へと向かう面と、外側へと向かう面の両面から捉える」(26)
「源泉へと向かうバルト」「根源にある「福音」」「福音主義神学」(26)
「時間は空間と並んで人間の「実存形式」」(45)

（３）『教会教義学』再考
１．バルトと自然神学
バルトとブルンナーにおける自然神学論争（1934 年）とは何だったのか。
純粋的な神学の方法論的議論だったのか。
２．自然神学論争のコンテクストとしての教会闘争

Ａ・マクグラス『「自然」を神学する ── キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011 年(原著、2008 年)。

「バルト ― ブルンナー論争が生じた一九三四年は、アドルフ・ヒトラー」「がドイツで独裁政権を掌握した年でもある。ブルンナーが自然に訴えたことの根底には、ルターにまで遡ることのできる、「創造の秩序」として知られる考え方がある」、「バルトの関心の一部を占めていたのは、国家を神にとってのモデルとするための神学的基盤を、ブルンナーがおそらく無意識のうちに築いてしまった、ということであった。」(218)

波多野精一『宗教哲学序論』「第二章一　バルトとブルンネル」(1940 年)
（『宗教哲学序論・宗教哲学』岩波文庫、2012 年、67-83 頁）

３．バルトから何を受け継ぐか。

キリスト教神学とは如何なる学問か。

キリスト教（生 → 人間）における神と学との緊張。

４．トランスのバルト論：バルト神学において自然神学は場を持つ。

トーマス・F・トランス『科学としての神学の基礎』教文館、1990 年（原著、1980 年）。

「神学の成層構造」「この成層構造は、三一論が神学全体の明確化と単純化が遂行される究極的な統一論的基礎を構成している」(6)

「神は創造において被造物と人間に与えた合理性の諸様態の内でご自身を啓示された」、「この宇宙を理解することは現代の自然科学的探究の主要目的であるが、これは神学にとっても深い関心事とならざるをえない」、「神学的科学と自然科学との相互関係」(13)

「唯一の基本的な認識方法」(22)、「認識しようとする実在に忠実でなければならない、また常に実在への冷徹なまでに忠実に関わりながら、行為し思惟しなければならない」、「両科学は一つの基礎的方法論をそれぞれの領域に適用したもの」「調和し合うように努めねばならない」(23)

「単に分析的にすぎない科学の偉大な時代は、今や終わろうとしている」(24)

「アインシュタイン」「キリスト教神学では、この段階は、すでに四〇年前にカール・バルトによって到達されていた」(25)

「科学は、いかなる分野であれ、事物の独立した実在性に強制されて、事物の内的な本性に統制的に関係づけられる、事物の認識であって、事物の内的な諸関係に照らして定式化されるものなのである」(30)

「アタナシオス」「「自然神学」と見なされるような議論を設定したのは、まさに創造と受肉についての統一された神学的理解の範囲内にであった」、「神認識と世界認識とが、創造者なる神にロゴスあるいは合理性の内に同一の究極的基礎を共有する」(105)

「バルトが伝統的自然神学に対して反対しているのは」「その合理的構造ではなく、それの持つ「独立的」という性格、すなわち自然神学が生ける三一の神の能動的な自己開示から抽象化し、「自然のみ」に基づいて展開する自律的な合理的構造なのである」、「その合理的構造が神認識の現実的内容と本質的に結合されるのでなければ、それは歪曲的な抽象化である、という主張」、「自然神学は正しく理解された場合には啓示神学の「内に」含まれる、とバルトは主張する」(121)

「幾何学は物理学の核心部に位置づけられる」(123)

「自然幾何学が動的で実在論的な物理学のなかに組み込まれている時空構造であるのと同様に、自然神学は動的で実在論的な神学のなかに組み込まれている時空構造なのである。」(124)

「神学的科学と自然科学との間には、本来的意味での「自然な」連関が存在する」(125)

「アンセルムス」「知解可能性と存在と統一は、あらゆる被造的実在を特徴づけるものである」（132）、「存在論的論証は被造的世界と知解可能性からではなく、神の至高の存在と、

自己同一的知解可能性がアンセルムスに押し迫ってきたのであった」、「自然神学といわゆる啓示神学との内的連関」「祈りの文脈」(133)

５．まとめ

(1) フォイエルバッハ宗教批判（近代的思惟）へのキリスト教神学の応答の一つの典型。

(2) 近代のキリスト教とその神学の問題性を鋭く捉え、キリスト教と神学の固有性を再確認した。神学にはその固有の論理と方法がある。

(3) フォイエルバッハの宗教批判に十分に答えたことになるのか。
フォイエルバッハ問題は終わらない。

(4) 宗教は不信仰な人間的努力という評価は、キリスト教の自己批判としてはわかるとしても、他の諸宗教を一方的にいっしょくたんに扱うのは正当なやり方と言えるか。バルトの立場からは、他の宗教との対話などあり得ない？！。

(5) ドイツ教会闘争における批判力。
戦後におけるバルトの権威化　→　バルト主義の弊害
バルトとバルト主義との相違

(6) 自由主義神学の過度の否定。
神学思想、とくに歴史的研究への否定的影響。聖書学と神学との亀裂は深まった。
↓
近代とキリスト教との区別の確認、その上で、近代との関わりを再構築すること。

＜参考文献＞

１．Barth, Karl
『カール・バルト著作集』『教会教義学』『バルト・セレクション』（全７巻）新教出版社。
(1) *Der Römerbrief* (Erste Fassung,1919), in :*Karl Barth. Gesamtausgabe,II. Akademische Werke*, Theologischer Verlag, 1985.
(2) *Der Römerbrief*(1922), Theologischer Verlag, 1984.
２．大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』新教出版社、一九八七年。
『恩寵と類比――バルト神学の諸問題』新教出版社、一九九二年。
３．ティリッヒ『キリスト教思想史 II』（著作集別巻３）白水社。
４．Ｈ・ツァールント『20 世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社。
５．Ｊ・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
６．森田雄三郎　『キリスト教の近代性』創文社。
７．Ｊ・Ｒ・フランク『はじめてのバルト』教文館。
８．大木英夫　『バルト』講談社。
９．ユンゲル『神の存在　バルト神学研究』ヨルダン社。
10．トーランス『バルト初期神学の展開』新教出版社。
11．吉永正義『神の言葉の神学　バルト神学とその特質』新教出版社。
12．佐藤司郎『カール・バルトの教会論　旅する神の民』新教出版社。
13．福嶋揚『カール・バルト　破局のなかの希望』ぷねうま舎。
『カール・バルト――未来学としての神学』日本キリスト教団出版局。
14．芳賀力『神学の小径』（全５巻）キリスト新聞社。